

クニマス発見記念

作家 千葉治平と田沢湖物語

「山の湖の物語」とうろくず国鱒

豊かな民話や伝説に彩られた田沢湖の青い水底に、かつて国鱒は神秘的な翳りに包まれて棲息していた。そして今、幻となった「亡びのうろくず（魚類）国鱒」は奇跡的に甦った。

詩人の魂と科学者の眼を持った千葉治平の、亡びゆくものへの愛惜の情、未知なるものへのあくなき探究心、そして復活へのロマンを、名著「山の湖の物語」や書簡の中に追求してみた。田沢湖も国鱒も、それは治平にとって文学でしか表しえないものだった。

千葉治平（一九二二—一九九二）



大正十年、秋田県の旧田沢湖町に生まれる。十五歳で単身、満州に渡り、昭和十九年大連市の南満州工業専門学校を卒業後、満鉄に入り、応召。同年帰国。復員後、日本放送電を経て、東北電力勤務。

昭和二十一年「蕨根を掘る人々」で秋田魁新聞の第一席に当選。二十九年「馬市果てて」で地上文学賞（家の光協会）。

一九六五年「虜愁記」で第五十四回直木賞受賞。

「八郎湯―ある干拓の記録」（講談社）、「アングレスの花」（家の光協会）、「山の湖の物語」（秋田文化出版社）ほか。

平成三年の「南部牛方ぶし」（盛岡タイムス）が絶筆となった。



→ 自筆カット「山の湖の物語」より

会期 平成23年4月2日（土）～6月5日（日）

会場 新潮社記念文学館

展示協力：堀川百合子氏 奥田敦夫氏